

和の花を育て守る

守っていききたい、かつては身近だった植物(例)



■フジバカマ (キク科)

源氏物語にも登場する秋の七草の一つですが、自生地はごく限られます。一般に流通するのは別種。葉は香料となり、海外との渡りをする蝶アサギマダラが蜜を好むことでも知られます。KBS 京都・緑化協会などが鉢植えなどで保全。

京都府レッドリスト：絶滅寸前種



■フタバアオイ (ウマノスズクサ科)

葵祭に欠かせないフタバアオイは、上賀茂・下鴨両社の境内周辺によく見られた植物でしたが、近年激減し、祭にも影響を与えています。「葵プロジェクト」と学校、企業などの「里親」によって保全繁殖が図られています。



■ヒオウギ (アヤメ科)

花は祇園祭に合わせるように咲き、厄除け・魔除けとして街で飾られます。扇が開いたような葉が特徴です。一般には草丈が低い変種のダルマヒオウギが飾られます。タネは漆黒で「ぬばたま」と呼ばれます。

京都府レッドリスト：準絶滅危惧種



■キクタニギク (キク科)

京都の東山から流れ出る菊溪(菊谷)川の河川敷に自生していたと伝えられますが、現在東山では確認できません。明るい色の葉で、晩秋に明るい小さな花を次々と咲かせます。

京都府レッドリスト：絶滅危惧種



■オケラ (キク科)

八坂神社「をけら詣り」ではその根を焚いて無病息災を祈ります。夏から秋にかけて白い花を咲かせます。かつては京都の山野で身近に見られ、薬用、食用、虫除けなどとして暮らしの必需品でした。

京都府レッドリスト：絶滅危惧種



■キキョウ (キキョウ科)

東アジアに広く分布し、半自然的な草地などに自生。秋の七草の一つで、薬用にも使われますが、国内では希少になっています。江戸期に八重など様々な園芸品種が作出されました。

京都府レッドリスト：絶滅寸前種

かつて暮らしの中で利用され、親しまれてきた植物は、住まいの近くにあり、すぐに出会えたものでした。しかし、生活様式や都市・森林の環境の変化、最近のシカの食害などで、身近だった植物が失われつつあります。さまざまな団体・個人の知恵を集めることにより、かつて身近だった和の花のある暮らし、環境を少しずつ取り戻せたいでしょうか。

1. 栽培の協力体制をつくり、鉢植えなど身近でできる栽培方法の普及を行います。
 2. 育て方とともに、その植物に関する生活文化を紹介する小冊子を発行します。
 3. 春や秋の展示会などを通じて、希少な植物とその生息環境の保全を訴えます。
- ネットワークの取り組み

希少になっていく植物

京都府レッドデータブック(RDB)2015年版では、2002年版より絶滅の危険性が高いカテゴリー(区分)に引き上げられた植物が数多くあります。

京都府RDB2015年版に掲載された種子植物

絶滅種	45種 (02年版 62種)	▼減
絶滅寸前種	222種 (" 157種)	増▲
絶滅危惧種	224種 (" 142種)	増▲
準絶滅危惧種	182種 (" 142種)	増▲
要注目種	75種 (" 54種)	増▲



栽培方法や生活文化を紹介する冊子『和の花を育てる』の発行

第1集 エイザンスミレ、フタバアオイ、オケラ、フジバカマを紹介 (2014年3月発行)
(公財)国際花と緑の博覧会記念協会助成事業

第2集 キキョウ、ヒオウギ、キクタニギクを紹介 (「京都市生物多様性プラン推進のために」の後半部として2015年1月発行)